世界人口全体が高齢化していくのに対して、次の 10 年そこらの間、貧困と暴力に満ちた多くの社会はますます多くの若者を増やすが、彼らにとって仕事の機会は不十分であろう。これら若者の増加は特に中東やアフリカで流行するだろう。これは人口増加の否定的な結果に最も関連した哲学者である、トーマス・ロバート・マルサスを我々に思い出させる。それを好もうが好まないが、近い将来における多くの国の危機はマルサスが考えたものであろう。

1798 年に出版されたマルサスの人口論は、その時代の著名な思想家への反応であり、特にフランス革命の波においてヨーロッパをより良いものにした新世紀のアプローチと変化および自由の雰囲気のおかげでアイデアの支持を得た英国のゴドウィンとスペインのコンドルセに対するものであった。ゴドウィンは、人間は理性により導かれれば完璧になり、人間の合理性は法律や制度無しで将来的に平和に生活することを可能にすると信じた。コンドルセはゴドウィン同様に、国々の間と階級の間の不平等を壊すことにより、人間は最終的に完璧な進歩をたどることができると信じた。マルサスは人間が完璧になることは事前の法則に反すると対抗した。マルサスは、たとえゴドウィンやコンドルセにより描かれた理想的な社会が現実のものになったとしても、少なくとも初期において、繁栄はより長く生きる子供の数を増やし、人口を増加させ、次に下層階級の人々と上流階級の人々を持ったより複雑な社会を作ると論じた。

しかしマルサスの理論―食料供給は等差数列的に増加するのに対して、人口は等比数列的に増加する―は間違っていた。産業革命の道具は農作物の生産量を著しく増加させると正しく予測したのはコンドルセであった。このように、コンドルセはマルサスの理論の欠点を暴き、我々が生きるために必要な食料とエネルギーは最終的には太陽から生じ、太陽は何十億年もの間燃え尽きないため、太陽のエネルギーを活用するために考案できる方法は実質的に無限であると論じた。

しかし、社会論者は彼らが答える質問よりも彼らの出す質問により評価されることもある。コンドルセは正しかったが、マルサスはより多大な支持を得た。彼は生態系の問題を現代の政治哲学に導入し、それによって現在の政治哲学を著しく質の高いものにした。人類は猿よりも高貴かもしれないが、我々は未だに生物学上の生き物である。このように、マルサスは我々の政治と我々の社会的関係は自然環境と地球における我々の住みつく密度によって影響を受けると示唆している。

どのように貧困が過度な人口から生じるかを論じたマルサスの等比数列的増加論は、社会的平和と食糧供給の関係についての彼の大きな論点の一例にすぎない。実はマルサスは彼のエッセイを何回か改訂しており、中心的な考え―人口は食料などの生活必需品の供給に課された限界まで拡大する―を保持しながら算数的議論を引っ込めている。値段や不平等な分配、政治的悪行が原因であれ、干ばつが原因であれ、食糧不足の生じている場所では紛争や病気がしばしば生じてきた。

地球環境にこれまでにない試練を与えて人口が増加していくにつれて―地球の貧困地域で

10 億人が空腹のまま寝て、暴力（政治と犯罪における）が拡大しながら―近い将来マルサスの言葉が頻繁に耳に入るようになるだろう。この状況は、世界の多くの地域で農作の妨げとなる大きな洪水、病気、干ばつを引き起こすと UN 化学チームは信じている地球温暖化によりさらに悪くなる可能性がある。
もしマルサスが間違っているなら、なぜ彼が間違っていることを何回も、何十年も何世紀も証明する必要があるのだろうか？おそらく基本的なレベルで、マルサスが正しいかもしれないといういつまでも残る恐れが存在している。1969 年に最初にアポロの宇宙飛行士によって、またテレビに張り付いた何百万人によって観察された脆く青い宇宙に浮かぶ宝石の光景は、地球温暖化、環境汚染、オゾン層の破壊、資源不足と人口増加に続いて、我々の生態系が生き残り繁栄していくためには成長のある程度の制限、マルクスが初めて認識した制限がなされるべきであるということを悟らせるものであった。